

日仏セミナー「活動的星形成を伴う銀河の化学進化」

田 村 眞 一*

標記のタイトルの下に、日仏セミナーが1986年11月5日から8日までの4日間、仙台（齊藤報恩館ホール）で開催された。これは日本学術振興会（JSPS）とフランス国立科学研究機関（CNRS）の援助によるもので、フランス側出席者10名、日本側出席者24名であった。更にマレーシアから1人、数人の登録に遅れた人々、それに地元の東北大から多数が加わった。代表者はフランス側がパリ天文台のロジャー・ケイレル博士、日本側は東京天文台の小平桂一教授であった。

内容は大きく分けて、1. 宇宙初期、2. 素過程 I（ガス雲の分裂）、3. 素過程 II（超新星と銀河の化学進化）、4. 活動的星形成を示す諸銀河、5. 星形成領域、6. 化学進化、7. 力学・環境、8. まとめ、のセッションから成るもので、一見して多岐にわたる内容を含み、セミナーの大型化が心配されたが、日仏両国出席者の構成が研究内容だけでなくいろいろな面でバラエティに富み、問題意識が多面的であったために、きわめてのり多いセミナーであった。この点、代表者をはじめ特に日本側 SOC（池内、寿岳、祖父江の3氏）が苦心してセミナーの内容を準備したその努力のあらわれだと言っよう。LOC は吉井・前原の両氏と田村がつとめたが、代表者と会場が離れていたこともあり、吉井氏がキー・パーソンとしての労を負った。地元東北大学理学部天文学教室では教室をあげての支援体制をつくり、セミナーが円滑に運営されるよう全面的に応援した。LOC の肩代りをしていただいたことを LOC は感謝したい。

セミナーは英語によってすすめられたが、常日頃、英語国の天文学者によって種々の会議で押しまくられている日本フランス両国出席者は十分に満足出来るところまで、議論を重ねることが出来た。セミナーの適度のサイズ（出席者総計およそ50名）と互の言葉の能力の共通点によるところ大である。

セミナーの成果は、特に独立した集録をつくるということをしてないが、東北大学理科報告第8輯の中に入れて出版することになったので興味のある方はこれをご覧いただきたい。ただ筆者の興味に関連した部分について短い感想をのべておこう。活動的星形成現象を示す銀河はハッブル系列のどの銀河にもみられるが、このような現象の生ずる直接原因、あるいは現象のおこる過程についての理屈づけはまだまだその試みの緒についたばかりの

ようだ。どうかして、銀河の化学進化から、活動的星形成へつながる必然性をあらわにしたいのだが……。両国における研究の歴史やアプローチの違いがなせるためか、例えば“活動銀河核”という術語とその含む概念に両国の間で差異があるのは興味深いことであった。

さて、天文学の分野における日仏セミナーは、太陽や恒星活動を主題とした前2回につづいて、第3回目に位置づけることが出来ると云われている。銀河関係では、きわめて限られたタイトルではあったが“紫外光超過銀河の構造と進化”の下に、日本側代表者高瀬文志郎教授（東京天文台、現国学院大学）とフランス側代表者ジャン・エドマン博士（パリ天文台）との間で、1984-1985の2年にわたり協同研究が実施されたことは、すでに天文月報77巻9号（1984年9月号）で紹介した。この協同研究はバースト的星形成現象を示す銀河の認識が一般的となった銀河研究の世界的動向と相俟って時宜にかなったものであった。これにひきつづき、更に両国の幅広い研究者の出席を求めて、日仏セミナーを開催しようではないかという計画が関連研究者の間で語られたのは1985年の3月から4月頃だったが、計画の全体像を大急ぎでまとめ両国の合意ができ、それぞれ学振とCNRSに申請書を提出するまでにこぎつけたのは5月に入ってからであった。このとき以来、日本側代表者小平桂一教授はフランス流個人主義によるポロモーシヨンの相手をすることとなり、特にセミナーの期日がせまってからにはテレックスと電話による打合せでかなり苦心したときく。最も基本的な点、フランス側出席者の最終的顔触れがなかなかきまらなかったからである。代表者をはじめ、日本側 SOC、LOC は、フランス側出席者がセミナーの主題や内容にはね返るため、確定結果をすみやかに、しかも正確に知りたかった。最終的には、小人数ではあっても、バラエティに富む人選がなされ、老・壮・青の年齢構成、理論・観測の別でもバランスのとれたデレゲーションであった。男性・女性半々となったのはお国柄のせいだろうか？ D. Alloin, J. Audouze, L. Bottinelli, F. Boulanger, R. Cayrel, F. Combes, E. Falgarone, L. Gouguenheim, D. Kunth, L. Vigroux の諸氏である。もっとも詳細に調べると所属機関がパリに片寄っているようにもみえるのだが……。

いずれにせよ、4日間にわたるプログラムの中での議論をはじめとして、ロビーや時間外の議論、話し合いもかなり有益だったように見受けられた。彼等は一様に、

* 東北大理 Shinichi Tamura

日本との共同研究に興味を示し、具体的にいろいろな提案をしていたことを忘れてはなるまい。今後もこのような共同研究が息長くつづくことをのぞみたい。

最後にパリ天体物理学研究所の唐牛 宏氏のことを記しておく。同氏は今回のセミナーだけでなく、日仏とい

うことになるに陰に陽に、両国のかけ橋の役割を演じている。パリを訪れた天文学者でお世話になっている方も多数あるだろうが、今回のセミナーを成功裏に終了出来たことは、彼のはたしている役割に負うところが多い。

NEWS

1986 年アンドロメダ座新星

岐阜県恵那市の鈴木充氏は、1986 年 12 月 5 日 19 時 32 分～35 分、19 時 36 分～43 分の間に撮影した 2 枚の写真フィルムでアンドロメダ座の $\alpha=23^{\text{h}}09^{\text{m}}5$, $\delta=+47^{\circ}10'$ (1950.0) の位置に、光度約 8 等級の新星状天体を発見して東京天文台へ連絡して来られた。同氏によると、11 月 27 日撮影のフィルム上には検出できず、静岡県のと久田実氏によると 12 月 4 日撮影のフィルム上で確認できた由であった。東京天文台では直ちに調査を始め、倉敷市の本田実氏に、同氏のフィルムチェックをお願いしたところ、12 月 2 日は 12 等より明るくはない、3 日はく

もり、4 日 8 等級、5 日 7.5 等級としてフィルム上で確認された。東京天文台では、関係観測所へ連絡すると共に、IAU へ新星状天体として打電した。5 日夜、岡山天体物理観測所より、スペクトルが得られ、幅広く広がった H_{α} , H_{β} などの輝帯と、それにとまなう吸収が見え、新星であることが確実となった、との連絡を受けた。堂平観測所では、直接写真が撮影され、その位置が下の通り測られた。

$$\alpha=28^{\text{h}}09^{\text{m}}47^{\text{s}}.72, \quad \delta=+47^{\circ}12'00''.8 \quad (1950.0)$$

尚、眼視による光度観測が次のように行われている。12 月 8.94 日、6.3 等、9.31 日、6.8 等、9.81 日、6.9 等など。

日本人による 1986 年の新星としては、8 月の和久田氏につづいて 2 個目である。(香西洋樹)

賛助会員名簿

(1987年3月5日現在の国会賛助会員は下記のとおりであります。ここに社名、代表者名を掲載させて頂いて感謝の意を表します。(五十音順))

旭光学工業株式会社
朝日新聞社科学部
アストロ光学工業株式会社
岩波書店
宇宙開発事業団
大阪市立電気科学館
沖電気工業株式会社
カールツァイス株式会社
河出書房新社
関東電気工業株式会社
(株)教育社 Newton 編集室
国際文献印刷社
啓文堂松本印刷
恒星社厚生閣
五藤光学研究所
コロムビア貿易株式会社
金光教本部教庁
(株)三
スライデックス(株)
サンシャインプラネタリウム
誠文堂新光社
(株)立風書房
地人書館
天文博物館
五島プラネタリウム
東京学術印刷株式会社
東京電力株式会社
(株)東芝

松本徹
武部俊一
岩川毅
緑川享
山内正男
北澤淳
藤村卓司
ハイソック・シュミット
清水勝
関井章義
笠井康弘
松本康弘
佐竹久男
五藤隆一郎
飛田利一
金光鑑太郎
恒川稔朗
尾関二郎
植野雅義
小川茂男
下野博夫
中田威夫
五島昇
船越昭二
平岩外四
佐波正一

東北電力株式会社
コダック・ナガセ(株)
名古屋放送株式会社制作部
ナルミ商会
日本光学工業株式会社
(社)日本測量協会
(財)日本地図センター
日本通信機株式会社
日本特殊光学
(株)ニホン・ミック東京本社
日本ユニパック株式会社
名古屋支店
(株)ニュートリノ
ネイチャー誌 日本編集局
浜松ホトニクス株式会社
ファコム・ハイタック(株)
システム第3部
富士通株式会社
システム統轄部
丸善株式会社
三鷹光器株式会社
三菱電機株式会社
宇宙衛星通信部
ミノルタカメラ株式会社
森田清
雄山閣出版株式会社
(株)渡辺教具製作所

玉川敏雄
田川敏
乗松要作
村福上俊男
坪岡成忠
高川恒義
崎正
川島正義
山田稔
萩村雄
黒木建雄
山本義朗
Dr. アラン・
アンダーソン
畫馬輝夫
笹原昭彦
小坂義裕
海老原熊雄
中村義一
望月孝則
田嶋英雄
長坂一雄
渡辺哲郎